
ヘンアイ！

伊舞 莓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘンアイ！

【Zコード】

Z8279F

【作者名】

伊舞 莓

【あらすじ】

お菓子の飴よりも『飴』が好き。なのに、当の『飴』が気付いてくれなくて・・・。幼馴染みにもだもだしたくて書きました第2弾。大晦日編です。

(前書き)

『恋愛』は佳品です。今回『恋愛』がテーマです。・・・恋愛

見えるとか云つてはいけません。

あたしは『飴』が好きだ。

そりや、お菓子の飴も好きだ。
でも別に、チョコとかアイスとか
も同じくう、好きなワケで。

寧ろあたしとしてはゼリーの方が好きなワケで。

うん。なんで、気付かないんだろう。

あたしの田の前にいるのは『飴乃辰也』（あめの たつや）。幼馴染みの、すつごくイイヤツ。因みにあたしは彼の名字から取つて『飴っち』と呼んでいる。

飴二ちは、にっこり笑った顔がかっこかわいくて、癒し系と大評判だ。ひょろつとした見た目（文化系って云われても納得してしまうよーな感じ）に反して力も強くて、柔道黒帯。勿論、柔道部に入っている。

彼は他の柔道部みたいにがつちりむきむき筋肉マンってワケでもない。だけど、先月あつた『学年別腕相撲大会』で学年3位だし。頭も悪くない。

そして今学校で出回つてゐる『学年何でもランキング』（新聞部発行）で【親切部門】1位になるほど、優しい、イイヤツなのだ。

そんな彼は、モテるワケで……【彼氏にしたい部門】2位なのです（1位は某タラシ君がダントツでかつたもつていてしまった）。

まあ【不思議な人部門（男子の部】と【天然な人部門（男子の部）】でも、ぶつちぎりの1位だったワケだけれど。

「あーもーつー飴っち（あめっち）はちゃんと5円玉持ってきてるつ？」

怒りにまかせて叫ぶと口元に黒い手袋が出現して、あたしの口を覆つた。

因みに、あたし達は付き合ってるのでなくて、序でに云うと、あたしは彼に片思い中、なのだ。

勿論、そんな事されて平常心で居られるハズもなく、あたしはアイツの顔すら見る事が出来ない状態だったり、する。なのになのに「ヤツは普通の顔で普通に接しあってからに、あたしのこの緊張はどうしたらいいのー？！」

「柚麻？ デラしたの、風邪でも引いた？」

「べべべべべ、べつに！ い、いつもどビビり、だし、です！」

「……えっと、僕はこの場合、ええ、違つだし、です！ つて返すべきなのかな？」

知るかそんな事ー！

右斜め上で困った様に笑う彼を見て、あたしは思わず拳を握つてフルフル震えてしまった。
なんでこんなに天然なのこの人は……！ な、なんか涙が出そうになってきた……。

「多分みんな起きてるだろ?ナビ、一応夜中だから、静かに。ね?」

』

彼はにっこり笑つて、あたしの口元を覆つていたモノをはずし「シーツ」とお決まりのポーズをしてきた。あたしはボンツと音が聞こえそうな勢いで頭に血が上ったのを自覚した。

あたしが意識しすぎなのかも知れない。だけど、だけどそんな事がされると、『この前の事』思い出しちゃうでしょ!この天然タラシー!

ワーンと声を上げて泣きたい心境だけど、勿論できるワケがな(流石にそっちの方が恥ずかしい)。

あたしは皿を逸らして飴玉を口の中に投げ込む。因みに今日はブルーベリー味。きっと皿が良くなる(別に悪くないナビ)。

あたしは飴ばっかり食べてる。一応自覚はある(と云つか、意識してやつてる)。

そんなあたしに付いた称号は『飴狂あめくる』『飴教教祖』『飴偏愛者』。……四文字熟語かと思つたけど、まあ別に良いんだ。うん、普通に好きだし。

でも、あたしは別に飴を『偏愛』しているワケではない。普通に好きではあるけれど。あたしが大好きなのは『飴』だ。

ちらつと気付かれ無い様に『飴づち』の方を見る。彼は彼で白い息を吐き出しながら携帯を弄つていた。あたしが飴を舐めている間、飴づちは絶対、自分からは話しかけてこない。対抗意識らしいけど、なんか可愛い。

あたしが『飴』が好きなワケ、何時気付いてくれるかな。

「んな感じじゃ、当分気付いてくれなさそうだけど。

あたしが飴好きを公言しているのは、云いたい気持ちを上手く云えないから。『飴づち』と向かって呑つと何時も自分の恥ずかしさから逃げてしまつて何も云えなくなつてしまつ。それで何時も落ち込んで、面と向かつて自分の気持ちを云えない自分が惨めで、情けなくて、だから「飴が好きだ」って云つて自分の気持ちを隠しながらだけ伝える。

多分、あたしの飴への愛は『偏愛』じゃなくて『変愛』だと思つ。愛つて、なんか大袈裟だけど、きっと、そんな感じ。

小さくなってきた『変愛』の象徴を舌の上に感じながら、あたしは新たに決意する。

取り敢えず、この前の事は記憶から消去……は、しないけど（だって、だつてファーストキスなんだもん！）今は自然に、いつも通り、飴づちと接しよう。うん。

うんうん肯きながら夜道を歩いていると「手袋……」と彼が呟いた。

「手袋、なんでしてこなかつたの？」

「うつ……いや、その、えつと……忘れ、まし、た……」

精神的にいっぱいで、マフラーは直前で思い出したけれど手袋は忘れてしまつた。なんだか指摘されると少し恥ずかしくて、ちょっと誤魔化そつかな。と思つたけれど、素直に云う。どうせ彼にはバレちゃうんだし。いつも云つ事にはなーんか鋭いんだよね……。過去の経験から肯垂れながら云つ。う、他人に指摘されるとやつぱり恥ずかしいつ。

すると、上から何とも云えないジットリとした視線が降ってきた。

「な、何？」

「いや……手袋忘れるくせに』『飴』は絶つつ対に忘れないな。と思つて」

ちよつとつひけふどんに』『飴つけ』は溜息を吐いた。確かに小ねご頃やどさんからかっただけど、そんなに嫌わなくても良いんじゃないかな。とも、罪悪感に苛まれながら思つ。

幼少期にさざん「共食い」と離し立て、靴の中に大量の飴玉を入れた前科持ちとしては耳に痛い限りだ（でもそれだけ、恋心を自覚する前の「構つて構つて攻撃」なのだけれど）。

因みに、なんでちやつかり飴は持つて来ているのかといつと、実はこのコートのポケットに何時でも常備してあるから忘れる事がないだけだ。けれども、そこに関しては黙秘にしておひづ。なんか、余計不機嫌になつやつだし。

「良いでしょ別に。好きなんだから」

「…………」

パイツとそつぽを向いて答える。右斜め上（本当に無駄におつきくなつちゃつて、やー。）からは無言、無反応とこつ辛いコンボが返ってきた。

それを感じながら、あたしは自分のかわいげの無さに切なくなつてきた。

あたしも、彼をあからさまに狙つてくる女の子達みたいに、見せかけでも良いから可愛い反応できないもんかなあ……。でもあたしがやると似合わないしなあ……。

キラキラお田々になつがい睫。

小さくて整つた顔のパー・ツ。

細くて折れそつなのに、出ぬトロ

出でるモ^デル体型……駄目だ。

思い出せば思い出すほど敗北感が募つてきた私は思わず俯く。
一人で悶々としていると、右手が何かに包まれた。

「へ？」

自分の右手を見てみると、消えていた。いや、イリュージョン！
とかではなくて、確かに元からコートのポケットの中に入れてたら
目には見えていたわけではなかつたけど。

けど！ そう云う事は重要じゃなくて、その、あたしのコートの
中にも、あたしの手が無くなつている、ワケで。
で、先を辿ると、なんとなんと、飴っちのポケットの中に、飴
っちの左手と共に消えている、ワケで。

「！ にゅ、むうつ……！」
「はいはい、叫ばない叫ばない」

飴っちは苦笑しながら右手に持つた何やら黒い物体であたしの口
を塞いでいる。

その手には、何故か左手の手袋。口元に押さえつけられた黒い手
袋を左手で受け取る。

「これ、安物だからや、そんなに温かいワケじゃないけど。ない
よりかはましでしょ」

「え？ な、ななんでつ付けてないの？！」

「そりや、手を繋ぐ為に僕の手から取つたから」

さも当然の様に「うなバカー！」

自分の顔が真つ赤な事ぐらい、ちゃんと自覚ができる。「ハハ

ハ」と爽やかに笑った隣の男は、とても楽しそうで。あたしは「もう！」としか云えなかつた。

……そりや勿論、付けるけど。

一回右手を離してもらつてから、あたしのサイズよりも明らかに大きな黒い手袋を左手に嵌めた。

そのブカブカな、飴つちの温度のする温かな手袋をしげしげと眺めてからあたしは不覚にも（といつか、思わず）呟いた。

「……指輪だつたら、良かつたのになあ」

「欲しいんなら、買いに行く？ 明日。新春バーゲンもやつてるし」

左手つてところで結婚指輪を連想してしまい、思わず呟いたそれがアイツの耳に入つてしまつた（そりやま隣にいるんだから当然だけども！）。「いい！ 全然いいから！！」と必死で取り消しておぐ。

……本当は確信犯だつたり……しないよね。解つてます……。

溜息を吐いて自分の妄想を打ち消す。本当に、期待してしまいうになる、自分が嫌だ。

彼の中での私はまったく変わらずに『幼馴染』なのだ。もう幼稚園児の頃よりも前からその認識は変わつていない。

悪友。親友。幼馴染。もしくはきょーだい。

コイツラを足して4で割つたぐらいで丁度云い表わせるような距離感。

近いよつで、手を伸ばすと実は遠くて思わず引っ込めてしまう。

最近は富に、そんな感じ。

「柚麻」

「なに？ 餅つか」

「僕の名前、覚えてる？」

「……そりゃ覚えてるけど」

「柚麻はさ『餅』好きだよね」

「……好き、だよ？」

『餅』を餅に、変えてでしか、云えない。やっぱり、これって変なのかな？ まあ答えは yes なわけだけれど。それぐらい自覚しているんだけど。

でも、だつてあたしには好きなんて伝える勇気はなくて、でも、でもずっと前からどうしようもなく、好きで、どうしても云いたくて。でも云うことなんかできなくて、何時も手を伸ばさうとした状態のまま固まってしまうのだ。

だから歪んだ形で、愛を伝える。

本当に、変なの。『変愛者』に相応しこよ。

自嘲氣味に苦笑する。

「今更何ー？ あたしが餅大好きなのなんて、今更でしょ？」

「……僕、さ。柚麻の中で、いつか、餅にも勝てる様な存在になるから。だから、それまで待つて」

「……ええつ？」

「先約つて、事で。こつかちゃんと、僕の名前、呼ばせてみせるから」

なんつー殺し文句だ。とまた真っ赤になつて、今度は足まで止

まつてしまつた。

そんなあたしを見下ろして月みたいに笑う彼が、本当に大好きで。

我慢できなかつたあたしは直ぐに「辰也！」って叫んでしがみついたんだけどそしたら「近所迷惑！」と怒られてしまつた。でも彼も耳まで真っ赤だつたから、あたしの『偏愛』は『愛』に『変化』しそうです。

因みにそんな風にじやれでいる間に年が明けてしましました。
そんなあたし達の大晦日でした。

(後書き)

ヘンタイシリーーズ終了です。いや今のところですけど。寧ろ連載にした方が良かつたかなとも思いますが、これはこれで。

改稿（2010/7/4）

右手と左手を「いやいや」とさせすぎました……
お恥ずかしい……。自分もつ間違つていなはず……！

ではお世話を頂きました皆様、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8279f/>

ヘンアイ！

2010年11月16日08時35分発行